2021/10/31中野教会「聖書の学び」

聖書個所：詩編94:1-7、109:16-20

　　　　　　　　　　**復讐の詩編/呪いの詩編**

　本日のテーマは聖書の中でも解釈に最も困難が伴うものの一つです。また新約と旧約との関係をどう理解するかという問題に密接に関連しています。「聖絶」の問題も新約と旧約の関係を理解する上での大きな障害になっていることはご存じの通りですが、本日のテーマの復讐の詩編/呪いの詩編も同様な意味で、聖書を全体として理解する上での大きな障害になっています。復讐の詩編は端的に言えば、自らの敵に対し神が復讐をなされるよう願う祈りです。それは即ち、敵を呪う祈りでもあります。日本でも「お百度参り」のごとく、特定の人物を呪い倒す、ための祈りの行（ぎょう）がありますが、イスラエルの場合は、全能の唯一神への祈りですから、その迫力は尋常ではありません。古来から、この「復讐の詩編」と呼ばれる詩編の数章や該当の詩編個所はカソリックの「教会の祈り」から排除されてきました。プロテスタントの場合は教団全体で詩編朗読が定型化されているわけではありませんが、やはり、この復讐の詩編については朗読の個所としてははずされているのではないか、と想像します。中野教会で使用している、詩編朗読の本はいかがでしょうか。今日のお話は、ドイツのカソリック神学者E.ツェンガー著（佐久間勤訳）『復讐の詩編をどうよむか』を大変参考にさせてもらっています。

　新約聖書には、ローマ書12:19に「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」とあります。ここで引用されている旧約聖書は申命記32:35からのものです。「復讐と報いとは、わたしのもの、 それは、彼らの足がよろめくときのため。 彼らのわざわいの日は近く、来るべきことが、すみやかに来るからだ」とあります。また主イエスの山上の説教での「敵を愛せよ」はあまりにも有名です。伝統的なキリスト教での理解は、旧約聖書における復讐の詩編のような敵への呪いのような個所は、主イエスの福音のメッセージによって乗り越えられたので新約の民にとっては過去の遺物である、というものです。この考え方は、旧約は、主イエスを指し示す事のみに於いて意味あり、旧約聖書は、基本的は乗り越えられたものとしての意味しかない、という考え方につながります。旧約聖書の中での矛盾とそれが持つ意味を考えようとしない態度です。これは現代でもかなり強力な考え方であり、新約初期の時代に、新約のみを聖書としたマルキオンに通じます。主イエスの教えを、教理として受け止める考えに通じ、新旧約全体として聖書である、ということから乖離します。

　私個人の問題意識を申し上げておきます。「敵を愛せよ」というメッセージについては、「そんなのできるはずがない」という気持ちが抑えられなく、主イエスがおっしゃった意味は、「自分が敵と思う者を愛するようにせよ」という意味ではないのではないか、と思うようになりました。「自分を敵とみなしている者を愛せよ」という意味だ、とか、愛する、というのは聖書で言う「犠牲を払う」の意味ではなく敵対関係が露わにならぬよう距離をおくことだ、とか屁理屈を考えてみましたが、そんなこと主イエスがおっしゃられるはずはありません。該当箇所はマタイ5:43-44です。「『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」とあります。

ここで主イエスが引用している聖書の個所は詩編139:22で「私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎みます。 彼らは私の敵となりました。」という個所と思いますが、この詩編139編も「復讐の詩編」の一つで、文字通りの意味で理解することは大きな誤解になります。後に述べるように「復讐の詩編」は、私、あなたを含む人間の心の底に渦巻く復讐心、敵愾心、破滅願望、暴力的力の崇拝、等の罪の現実を赤裸々にし、義なる神と対峙させることにこそ、基本的意味があります。そしてそれらを乗り越える希望を主なる神に託することです。従って、主イエスのおっしゃられているのは規範として、乃至は努力目標として自分の敵を愛するようにしなさい、というようなことではありません。主イエスはそんなこと我々人間に不可能なことくらいよくご存じです。むしろ、「そのようなことはすべて神の前に吐露しなさい。その願いを自ら適えようとするのは、破滅を導くのでやってはいけない。その願いはすべて神が適えてくださる」と言うことをおっしゃっているのだと思います。「敵を愛せよ」になぞらえて言えば、「敵対関係を愛の関係にする、神の力に信頼しなさい。あなたたちがなすべきことは、唯一、神に委ねることだ」ということになる、と思います。全能の神への信頼、という信仰の問題なのであって、道徳律の問題ではありません。

「復讐の詩編」に出てくる、復讐・報復の願い、呪いの言葉、相手の破滅を願う言葉等々は苦難の中にある人々にとっては自然な感情であり、主なる神に包み隠すようなことこそ問題なのです。「いいこちゃん」でいられるはずはありません。すべて主に申し上げることこそ必要なのです。そしてその実現を主に委ねることです。イスラエルの民の現実はそのような願いを自ら実現できるような生易しい状況ではありませんでした。私たちにしても、これらの願いの対象となる人物は力ある人間であることが多く、自らの努力によって実現しようとしても逆に返り討ちに会うだけ、というのがほとんどです。そのような、弱く、苦難の中にある人々にこそ、主なる神の力が働くのです。強い者には神の力は不要です。

では「復讐の詩編」と称せられるところから今日の聖書個所としてあげた、94章と109章の二つを見ながら、E.ツェンガーの見方を紹介しつつ、私の見方ももうしあげていきたい、と思います。「復讐の詩編」全体と関係個所については資料に載せてありますので、後程、是非ご覧いただきたい、と思います。まず詩編94編です。この章にはタイトルに類する言葉はありませんが、七十人訳では「ダビデの賛歌」とされています。内容的に見てダビデの詩とは考えられませんので形式的な付加と考えられます。ユダヤ教の聖書解釈書タルムードのこの詩編個所にはエルサレム滅亡の時、レビ人が歌った歌とされています。この章の最後の23節aの「主は彼らの不義をその身に返し」のところでバビロニア軍が神殿に侵入したため最後まで詩を歌うことができなかった、という解説があるそうです。これを前提にすればBC587の出来事ということになります。ここでの敵はバビロニアで、受難者はユダ王国の貴族階級ということになります。時期について、このあとの時期だという説も強くありますし、敵はイスラエルの地における支配階級であり、受難者は苦難にある一般の民である、という説もあります。もし、我々が、現在の時代状況に重ね合わせるとすれば、圧政下にある、支配層と苦難にある弱き民、との構図で考えるべきことでしょう。

最初に94:1-7をみます。「復讐の神、主よ。 復讐の神よ。光を放ってください。地をさばく方よ。立ち上がってください。 高ぶる者に報復してください。主よ。悪者どもはいつまで、 いつまで、悪者どもは、勝ち誇るのでしょう。彼らは放言し、横柄に語り、 不法を行う者はみな自慢します。主よ。彼らはあなたの民を打ち砕き、 あなたのものである民を悩まします。彼らは、やもめや在留異国人を殺し、みなしごたちを打ち殺します。こうして彼らは言っています。 「主は見ることはない。ヤコブの神は気づかない。」」とあります。「復讐の神、高ぶる者に報復してください」は復讐の神に、私の敵に報復するよう求めている、ことばで、「復讐の詩編」ずばりです。詩編における「復讐」の出典個所は7か所あります。その大部分は主なる神を「復讐の神」と呼んでいる箇所です。詩編以外でこの言葉が使われているのは創世記4:15の「カインを殺す者は七倍の復讐を受ける」を始めとし、モーセ五書から預言書にまで万遍なく使われています。従って、主なる神を「復讐の神」と呼ぶのは例外的ではなく、イスラエル信仰の基本的なところに横たわっている、と考えるべきです。それは人間の根底に復讐心が強く住み着いていることの反映でもあります。

それを「復讐の神」を引き合いに出すということは、イスラエルの民は無力で、自らが復讐する力を持たないため、この全能の神に「復讐」を頼らざるをえない、ことを意味しています。パウロが「自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。」というのはこの苦難にある「新しきイスラエルの民」は復讐の力は持っておらず、主なる神の力に頼らざるを得ない、ということです。「聖戦」を「主の戦い」とし、自分たちは「主が戦われる」の後をついていけばよいのだ、という考えに通じています。出エジプトの民はそもそも、他民族と戦う軍事的実力などなかったのです。主なる神の力に頼るしかないということなのです。この個所を読むとき、自分ではできないので、主なる神が、私の復讐を実行してください、と心から祈り願う、という受難者の姿があります。主なる神に復讐心を隠す、のは信仰者の態度ではありません。神はそんなのすぐに見抜いています。正直に神に申し上げるべきです。復讐心も神の被造物の一部であることは疑いないことだからです。

94:02に「高ぶる者に報復してください」とありますが、ここでの「報復してください」という言葉は「復讐」とは別の言葉であり、良いことに報いる時にも使用されることばです。「復讐の詩編」の言葉遣いが大変感情がこもった言葉であるため、「復讐」と「報復」の意味を分け、復讐の詩編の「復讐」の言葉は本来「報復」の意味であって、重大な罪の行いに対し、相応の「報復」を主なる神に祈り求めているのであって、復讐の実行を神に願い求めているのではない、と解釈する向きがあります。国家間の問題をこの考え方で解釈し、復讐の戦争は認められないが報復の戦争は認められる、という結論を引き出します。これは聖書の文脈、趣旨に反します。94.01-02は主なる神に「復讐をもって報復してください」と言っているのです。また、苦難の民が、この復讐心をどこにも持って行けず、最後に主なる神にしかお願いできない、という受難者の激情を軽視している、と言わざるを得ません。聖書はその激情を神にぶつけて良い、といっているのです。ごまかしは、神に対する不誠実です。

「気づけ。民のうちのまぬけ者ども。 愚か者ども。おまえらは、 いつになったら、わかるのか。」という第二段落の部分は自分の復讐の願いは主なる神が必ず実現させてくれるから、それを知らない民は、まぬけだ、と言っています。これは主なる神に対する信頼の逆説的表現です。15節で「さばきは再び義に戻り、心の直ぐな人はみな、これに従うでしょう。」という、ある意味で“できすぎ”の言葉で結ばれています。ここで、イスラエル信仰における「希望」のことを言わねばなりません。イスラエル信仰において過去の現在化は祭儀を通しての「記憶の思い起こし」によります。英語のrememberが「記憶」と「思い起こし」の両方の意味がありますが、ヘブル語の「za:kar」も同じです。出エジプトの記憶を思い起こし、それを現在の世界に見出す、ことで現在化するのです。では未来の現在化はどうやって起きるのでしょう。それを媒介するのは「希望」です。全能の主なる神の約束は必ず実現するはずですから、そこに希望をつなぐのです。その主なる神の約束の予兆を現在の世界に見出した時、希望は現在化するのです。「希望」は名詞形で「tiquwa:」です。この「復讐の詩編」の個所では自分の期待する復讐は必ず神が適えてくださるのだから、それを知らない者は馬鹿者だ、という訳です。今、我々の歴史を支配している主なる神が「復讐の神」なのだからその方に希望をつなげばよい、我々はそれを待つだけだ、という訳です。

この章の最後の22-23節を読んで次の章に行きます。「しかし主は、わがとりでとなり、 わが神は、わが避け所の岩となられました。主は彼らの不義をその身に返し、 彼らの悪のゆえに、彼らを滅ぼされます。 われらの神、主が、彼らを滅ぼされます。」

次の109編はこれまた解釈は難物です。タイトルは「ダビデの賛歌」とありますが、無視してよいでしょう。ペテロがユダの代替者を選ぶ時、イスカリオテのユダの結末の表現でこの詩編の一節を引用しています。使徒の働き1:20で「実は詩篇には、こう書いてあるのです。『彼の住まいは荒れ果てよ、そこには住む者がいなくなれ。』また、『その職は、ほかの人に取らせよ。』とあります。この詩編は「呪いの詩編」として昔から有名な詩編であったと想像されます。ペテロはユダに対する呪い、の意味合いを含めてこの詩の一部を引用したのでしょう。

第一段落のところをみてみましょう。1-5節です。1-2節をお読みします。「賛美する神よ。 黙っていないでください。彼らは邪悪な口と、欺きの口を、私に向けて開き、 偽りの舌をもって、私に語ったからです。」とあります。神に対し「黙っていないでください」と言っています。同様の表現が他の詩編にもありますが、ほとんどは「復讐の詩編」に上げられているところです。また、ユダ王国がバビロニアに滅ぼされる直前の預言者ハバククが「主よ。私が助けを求めて叫んでいますのに、 あなたはいつまで、聞いてくださらないのですか。 私が「暴虐」とあなたに叫んでいますのに、 あなたは救ってくださらないのですか。」と叫ぶのも、同じ趣旨と思います。神に抗議しているのです。イスラエルの主なる神は人間と言う罪の深みにある者が何と抗議をすることも容認する神だという点が重要です。間違っているかもしれない。しかし、我慢ならない抗議の気持ちをぶつけて良い、というメッセージです。抑えられない感情はそのまま主なる神にぶつけて良い、というのです。これは驚くべきことです。イスラエル信仰の真髄が示されている、と言ってよいと思います。いくら抗議をしようが、選びの民への恵みの約束がひっくり返ることはない、という信頼が底流にあるのです。

第二段落は悪者に対する呪詛です。6-7節に「どうか、悪者を彼に遣わしてください。 なじる者が彼の右に立つようにしてください。彼がさばかれるとき、彼は罪ある者とされ、その祈りが罪となりますように。」とあります。自分を迫害する者に神が悪者を遣わして、彼を非難する者を彼の右に立ち、絶え間なく非難するようにしてください、というのです。こんなことを誰かが祈っているとすれば、当人はたまったものではないはずです。それを知ったら生きた心地がしないでしょう。苦にして本当に死んでしまうかもしれません。この呪詛というものは世界のどの宗教にもあります。それらの中ではイスラエル信仰はむしろ、魔術的なことに振り回されることに極めて警戒的である、という特徴があります。呪詛に力があることは認めるが、それは神から出たことではなく、人間のどろどろした心情の世界とつながったものである、という理解が根本にあるのだと思います。日本は、古代から、これが“大はやり”でいまだ根強く続いています。これも人間の本性に由来していることを認めつつも抑制力を働かせるべきです。その具体的形としては、正直に神にぶつけることです。他人の破滅を願う祈りです。祈りの中で昇華し、具体的な行動に起こさないで済むようにする、ということです。主なる神は受け止めてくださる、と言っているのです。

第四段落にいよいよ「呪い」の言葉が登場します。17-18節をお読みします。「彼（迫害者）はまたのろうことを愛したので、 それが自分に返って来ました。 祝福することを喜ばなかったので、 それは彼から遠く離れました。彼はおのれの衣のように のろいを身にまといました。 それは水のように彼の内臓へ、 油のように、その骨々にしみ込みました。」とあります。迫害者の呪いは自分に返ってくること、また多くの呪いが彼の周りをとりまき、彼の体の一部と化してしまっている」と言っています。ここでの2つの「呪う」は「qa:lal」という単語で神のヘセド、即ち、慈しみの一切から外されること、を意味しています。このヘセドという言葉は旧約聖書における最重要単語の一つで、「愛する」「慈しむ」「やさしくする」「親切にする」「捧げる」「信仰する」というように多義的なことばですが神の慈しみと言う訳（やく）が多くの場合ぴたっとくるように思います。「呪い」はそこから排除されることです。反対語は「祝福する」（ba:rak）です。神の慈しみが子々孫々に続くように、という祈りのことです。ここでは、受難者が圧政者を呪う、というより、圧政者が自分で好んで「呪い」の対象となっていく、と言っています。神の慈しみからの排除という排除の論理も裏側にあります。

「呪う」と訳されるヘブル語の単語にはもう二つあります。その一つは「a:rar」という動詞です。「ka:lal」が「祝福する」の反対語として、基本的には、神との関係においてのみ使用されるのに対し、「a:rar」は最も一般的な「呪う」という意味です。呪術的な呪い、のようなものはこの言葉です。もちろん、神との関係において使用されることもありますが、大部分はイスラエル宗教共同体の内部規律に係ることです。申命記27:17-18に「隣人の地境を移す者はのろわれる。」民はみな、アーメンと言いなさい。「盲人にまちがった道を教える者はのろわれる。」民はみな、アーメンと言いなさい。」とありますがここでの「のろわれる」が「a:rar」です。共同体による保護から外される、という結果を伴います。ここに、共同体からの排除の論理があります。

もう一つは「ha:ram」です。名詞形は「he:rem」であり、かの「聖絶」の言葉です。原初的な意味は「滅ぼし、つくす」ことです。異教の神の霊の働きを完全に滅ぼすことです。パウロが第1コリントの最後、16:22で「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください。」とあるうちの「のろわれよ」はこの「he:rem」です。そして後にカソリック教会での除名・追放の時に使われる言葉になりました。パウロの「呪われよ」は「滅びに落ちよ」の意味です。教会からの除名も同じ意味で「地獄に落ちよ、GoToHell」のことです。逆に新改訳旧約における「聖絶」の部分は「呪い」と訳しても良い、ということになります。文語訳聖書ではこの単語は「詛う」と訳されています。例えばヨシュア記6:17は「この邑（まち）およびその中の一切の物をば詛（のろ）はれしものとしてエホバに献（ささ）ぐべし」とあります。この言葉も、神と人の全空間からの追放という排除の論理が厳としてあります。

「qa:lal」「a:rar」「ha:ram」の ３つの「呪う」のうち、「復讐の詩編」で使用されているのは「qa:lal」で、神と人の関係における「呪い」にのみ使用される言葉です。神の恵みより完全に外されることで、即ち死です。霊肉両面での死ですから死後の世界もありません。

第五段落に入ると、調子がガラッと変わり、21-22節「しかし、私の主、神よ。 どうかあなたは、御名のために 私に優しくしてください。 あなたの恵みは、まことに深いのですから、 私を救い出してください。私は悩み、そして貧しく、 私の心は、私のうちで傷ついています。」と言っています。なぜ急につつましやかな人間に代わってしまうのか。これまでの、神への抗議、迫害者への呪詛、呪いで包み込む、というような強硬姿勢がガラッと変わるのです。第六段落の最初26節は「わが神、主よ。私を助けてください。 あなたの恵みによって、私を救ってください。」と言っています。この突然の変化は何なのでしょう。もしくはこの 変化の間には大きな溝があるのでしょうか。実は、詩編にはえも言われずの突然変異が沢山あります。

以前から疑問が解消されない突然変異はヨブ記です。模範的信仰者ヨブが神のサタンへの許容により大苦難に突き落とされ、この苦難はヨブの罪に起因していることしか考えられない、という友人に猛然と反駁し、果ては、神に抗議するところまで行きます。神、自らがすべての創造主であり、すべての出来事を支配しているのだ、ということをヨブに開示したとたんに、自分の言ったことを悔い改める、ということになります。不自然極まりないです。そして財産、子孫を再び得て、長寿を全うし、死んだ、とされています。旧約において、全能の神が自らを表す、という「神顕現」は、世界がまるで変化する、ことを引き起こす、という伝統的なイスラエル信仰の表現に当てはめたものだろう、くらいしか説明は思いつきません。もし、そうだとしたら、詩編の章のなかでの突然変異のところには「神顕現」という重大な出来事が隠されている、と理解することになります。詩編109編にもこれが当てはめられるのかどうか、は解りません。とにかく、間（あいだ）になにか重大な出来事が隠されているに違いありません。肉体的死があって、あとの部分は死後の神の国での出来事なのかもしれません。

もう一つ、ヨブ記との関連では、友達のヨブへの説得に対し、神の言葉が与えられます。42:8で「さて、主がこれらのことばをヨブに語られて後、主はテマン人エリファズに仰せられた。「わたしの怒りはあなたとあなたのふたりの友に向かって燃える。それは、あなたがたがわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったからだ。」とある点です。友人は「真実」を語らなかったとして神の怒りを買っています。ここでの「真実」は確実なこと、を意味しており、証拠もなくヨブは罪を犯しているのではないか、という不確実なことを言ったことが責められているようです。これら友人がヨブのようでなかったと責められています。ヨブは、自分は罪を犯してこの苦難を招いたはずはない、ということを正直に繰り返し言ったにすぎません。しかし、それが「真実」な態度と評価されているのです。どうも、自分の気持ちを正直に主なる神に申し上げることこそが神により「真実」とみなされる、ということのようです。そうすると、「復讐の詩編」において復讐心をさらけ出している受難者こそ、神により「真実」とみなされる、ということではないか、という驚くべき解釈にまで行きつきます。主なる神に復讐心を包み隠す方が罪ある態度だと言うことです。ちなみに、協会共同訳では「確かなこと」と訳されており、珍しく逐語訳的です。

そして、高まった感情をすべて主に吐露し、その復讐を確実に実行してくださる神に委ねることこそが「復讐の詩編」の背後にある考え方です。当方が、誤解しているというのであれば、この祈りを続けているどこかで示されるはずです。その時は躊躇なく悔い改めましょう。まだこの復讐の話は主なる神と私の間だけのことですから、取り返しのつかないような事態には至っていません。私自身も「許しがたい。復讐の衝動を感ずる」人間がいます。神に復讐の願いを捧げて良い、というのです。このような主は他にはいないように思います。

以上が私の「復讐の詩編・呪いの詩編」の解釈です。最後にもうしておかなければならないことが一つあります。キリスト教の古代教父はこの「復讐の詩編」における復讐の対象はユダヤ人としました。呪いの言葉をかける対象がユダヤ人である限り、正当なことだとしたのです。使徒の働きにおいてイスカリオテのユダの代役の選出の時、ペテロが「復讐の詩編」を引用したことが根拠とされています。ユダヤ人迫害が聖書の言葉により正当化されたのです。主なる神にその復讐をゆだねる、という部分が欠落しています。これをナチス擁護の神学者が踏襲しました。ドイツ・キリスト者は旧約聖書をユダヤの血につながるものとし、ユダ王国と対立した北イスラエルの人々をアーリア人種につながる者としました。旧約聖書をキリスト教信仰の文書から基本的に外し、しかも新約聖書からユダヤ人の痕跡を消した新約聖書をでっち上げたのです。初期キリスト教会から続く復讐の詩編でユダヤ人に「復讐」を勧めてきたことは歴史的事実であり、キリスト教会の恥部（ちぶ）です。「復讐の詩編」を見えないようにすることでは「悔い改め」になりません。むしろ、復讐心を持ち、できれば暴力的に復讐を果たしたい、という衝動に駆られる、我々の現実を直視し、復讐の実行を神に委ねることが最も賢明です。復讐を自ら実行することはお互いに傷つくことが「おち」であり、何の得にもなりません。そのくらいなら全能の父なる神に委ねることが一番良いに決まっています。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日の「学び」の時を感謝いたします。復讐の詩編/呪いの詩編、を通して、すべての自分の気持ちを主に申し上げ、復讐を全能の神に委ねることこそ信仰者の態度である、ことを知りました。復讐心を隠す事こそ父なる神に対する不信である、というメッセージだと思います。「報復」に名を借りた「復讐」が横行しています。彼らの欺瞞にこそ、「神の復讐」が不可避と信じます。全能の主なる神に信頼し、すべてを委ねる信仰を強めてください。我らの主イエス・キリストの御名により、祈ります。アーメン）